



OpenShift Dedicated 4

セキュリティおよびコンプライアンス

OpenShift Dedicated での Security Context Constraints の設定

OpenShift Dedicated 4 セキュリティおよびコンプライアンス

OpenShift Dedicated での Security Context Constraints の設定

法律上の通知

Copyright © 2024 Red Hat, Inc.

The text of and illustrations in this document are licensed by Red Hat under a Creative Commons Attribution–Share Alike 3.0 Unported license ("CC-BY-SA"). An explanation of CC-BY-SA is available at

<http://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/>

. In accordance with CC-BY-SA, if you distribute this document or an adaptation of it, you must provide the URL for the original version.

Red Hat, as the licensor of this document, waives the right to enforce, and agrees not to assert, Section 4d of CC-BY-SA to the fullest extent permitted by applicable law.

Red Hat, Red Hat Enterprise Linux, the Shadowman logo, the Red Hat logo, JBoss, OpenShift, Fedora, the Infinity logo, and RHCE are trademarks of Red Hat, Inc., registered in the United States and other countries.

Linux[®] is the registered trademark of Linus Torvalds in the United States and other countries.

Java[®] is a registered trademark of Oracle and/or its affiliates.

XFS[®] is a trademark of Silicon Graphics International Corp. or its subsidiaries in the United States and/or other countries.

MySQL[®] is a registered trademark of MySQL AB in the United States, the European Union and other countries.

Node.js[®] is an official trademark of Joyent. Red Hat is not formally related to or endorsed by the official Joyent Node.js open source or commercial project.

The OpenStack[®] Word Mark and OpenStack logo are either registered trademarks/service marks or trademarks/service marks of the OpenStack Foundation, in the United States and other countries and are used with the OpenStack Foundation's permission. We are not affiliated with, endorsed or sponsored by the OpenStack Foundation, or the OpenStack community.

All other trademarks are the property of their respective owners.

概要

このドキュメントでは、OpenShift Dedicated でセキュリティーコンテキストの制約を設定する手順を説明します。

目次

第1章 監査ログ	3
1.1. API の監査ログについて	3
1.2. 監査ログの収集	4

第1章 監査ログ

OpenShift Dedicated 監査は、システムに影響を与えた一連のアクティビティを個別のユーザー、管理者、またはその他システムのコンポーネント別に記述したセキュリティー関連の時系列のレコードを提供します。

1.1. API の監査ログについて

監査は API サーバーレベルで実行され、サーバーに送られるすべての要求をログに記録します。それぞれの監査ログには、以下の情報が含まれます。

表1.1 監査ログフィールド

フィールド	説明
level	イベントが生成された監査レベル。
auditID	要求ごとに生成される一意の監査 ID。
stage	このイベントインスタンスの生成時の要求処理のステージ。
requestURI	クライアントによってサーバーに送信される要求 URI。
verb	要求に関連付けられる Kubernetes の動詞。リソース以外の要求の場合、これは小文字の HTTP メソッドになります。
user	認証されたユーザーの情報。
impersonatedUser	オプション。偽装ユーザーの情報 (要求で別のユーザーを偽装する場合)。
sourceIPs	オプション。要求の送信元および中間プロキシからのソース IP。
userAgent	オプション。クライアントが報告するユーザーエージェントの文字列。ユーザーエージェントはクライアントによって提供されており、信頼できないことに注意してください。
objectRef	オプション。この要求のターゲットとなっているオブジェクト参照。これは、 List タイプの要求やリソース以外の要求には適用されません。
responseStatus	オプション。 ResponseObject が Status タイプでなくても設定される応答ステータス。正常な応答の場合、これにはコードのみが含まれます。ステータス以外のタイプのエラー応答の場合、これにはエラーメッセージが自動的に設定されます。

フィールド	説明
requestObject	オプション。JSON 形式の要求からの API オブジェクト。 RequestObject は、バージョンの変換、デフォルト設定、受付またはマージの前に要求の場合のように記録されます (JSON として再エンコードされる可能性がある)。これは外部のバージョン付けされたオブジェクトタイプであり、それ自体では有効なオブジェクトではない可能性があります。これはリソース以外の要求の場合には省略され、要求レベル以上でのみログに記録されます。
responseObject	オプション。JSON 形式の応答で返される API オブジェクト。 ResponseObject は外部タイプへの変換後に記録され、JSON としてシリアライズされます。これはリソース以外の要求の場合には省略され、応答レベルでのみログに記録されます。
requestReceivedTimestamp	要求が API サーバーに到達した時間。
stageTimestamp	要求が現在の監査ステージに達した時間。
annotations	オプション。監査イベントと共に保存される構造化されていないキーと値のマップ。これは、認証、認可、受付プラグインなど、要求提供チェーンで呼び出されるプラグインによって設定される可能性があります。これらのアノテーションは監査イベント用のもので、送信されたオブジェクトの metadata.annotations に対応しないことに注意してください。キーは、名前の競合が発生しないように通知コンポーネントを一意に識別する必要があります (例: podsecuritypolicy.admission.k8s.io/policy)。値は短くする必要があります。アノテーションはメタデータレベルに含まれます。

Kubernetes API サーバーの出力例:

```
{
  "kind": "Event",
  "apiVersion": "audit.k8s.io/v1",
  "level": "Metadata",
  "auditID": "ad209ce1-fec7-4130-8192-c4cc63f1d8cd",
  "stage": "ResponseComplete",
  "requestURI": "/api/v1/namespaces/openshift-kube-controller-manager/configmaps/cert-recovery-controller-lock?timeout=35s",
  "verb": "update",
  "user": {
    "username": "system:serviceaccount:openshift-kube-controller-manager:localhost-recovery-client",
    "uid": "dd4997e3-d565-4e37-80f8-7fc122ccd785",
    "groups": [
      "system:serviceaccounts",
      "system:serviceaccounts:openshift-kube-controller-manager",
      "system:authenticated"
    ],
    "sourceIPs": [
      "::1"
    ],
    "userAgent": "cluster-kube-controller-manager-operator/v0.0.0 (linux/amd64) kubernetes/$Format",
    "objectRef": {
      "resource": "configmaps",
      "namespace": "openshift-kube-controller-manager",
      "name": "cert-recovery-controller-lock",
      "uid": "5c57190b-6993-425d-8101-8337e48c7548",
      "apiVersion": "v1",
      "resourceVersion": "574307"
    },
    "responseStatus": {
      "metadata": {},
      "code": 200,
      "requestReceivedTimestamp": "2020-04-02T08:27:20.200962Z",
      "stageTimestamp": "2020-04-02T08:27:20.206710Z",
      "annotations": {
        "authorization.k8s.io/decision": "allow",
        "authorization.k8s.io/reason": "RBAC: allowed by ClusterRoleBinding \"system:openshift:operator:kube-controller-manager-recovery\" of ClusterRole \"cluster-admin\" to ServiceAccount \"localhost-recovery-client/openshift-kube-controller-manager\""
      }
    }
  }
}
```

1.2. 監査ログの収集

must-gather ツールを使用して、クラスターをデバッグするための監査ログを収集できます。このログは、確認したり、Red Hat サポートに送信したりできます。

手順

1. `-- /usr/bin/gather_audit_logs` を指定して `oc adm must-gather` コマンドを実行します。

```
$ oc adm must-gather -- /usr/bin/gather_audit_logs
```

2. 作業ディレクトリーに作成された **must-gather** ディレクトリーから圧縮ファイルを作成します。たとえば、Linux オペレーティングシステムを使用するコンピューターで以下のコマンドを実行します。

```
$ tar cvaf must-gather.tar.gz must-gather.local.472290403699006248 ①
```

① **must-gather-local.472290403699006248** は、実際のディレクトリー名に置き換えます。

3. Red Hat カスタマーポータルでの [カスタマーサポート ページ](#) で、圧縮ファイルをサポートケースに添付します。